

---

# 彼女の部屋で 1 2 月 3 1 日

無名 新人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女の部屋で12月31日

### 【Nコード】

N2271J

### 【作者名】

無名 新人

### 【あらすじ】

大晦日の今日。俺は大学近くにある彼女の部屋へ向かっていた。

今日は大晦日。大学の連れのほとんどは、実家で笑ってはいけな  
いアレでも観てる頃だ。で、俺は実家には帰らずに年を越す予定。  
寂しくなんてない。まったくもって、これっぽっちも。むしろこれ  
からのことを考えると、勝手に顔がにやけてしまっぐらいだ。俺は  
今彼女の家へと薄暗くなってきた夜道を歩いている。そう、俺は彼  
女の部屋で彼女と一緒に新年を迎えるんだ。彼女もまた親元から遠  
く離れた、大学近くのマンションに住んでいる。そして、帰郷せず  
にこっちで年末年始を過ごす。これで彼女の家に行かないなんて方  
がおかしい。えーと、この角を曲がって、青い屋根の家で曲がって  
さらに三つ隣だったっけ。場所は知っていても彼女の部屋へ行くの  
はこれが初めてだった。

「え！ どうしたの？」

ドアを開けた彼女は驚いていた。実は、今日訪ねることを教えて  
ない。

「ちよつとびつくりさせようかと」

「うん。入って入ってー」

はにかんだ表情で出迎えてくれる。化粧つ気のない丸くて小さな  
顔。流れるような肩まで伸びた髪。前髪から覗かせるくりつとした  
瞳。よく笑う大きな口には微笑が浮かんでいた。やっぱりかわいい。  
「お邪魔しまーす」と玄関に上がるといつそう胸が高鳴り始める。  
逸る気持ちを抑えて中に入った。「外寒かった？」「そうでもない  
よ」氣遣われながら暖房の効いたリビングへ通された。デザイナー  
ズマンションの一室。落ち着いた白の色調の室内はシンプルで整然  
としていて、その中にくまのぬいぐるみがちょこんと置いてあった。  
本棚には専門書や有名人のエッセイ、小説以外に少女漫画やアニメ  
のDVDも少しだけ。へー、こういうの見るんだ。なんだかわかい

らしい。と、眺めているのに気づいたのか、「恥ずかしいから」とテーブルにあった雑誌で漫画のあたりを隠された。少しぐらい少女趣味でも良いと思うけど。なんて言おうものなら怒り出しそうな気がしてやめた。俺はそんな彼女が好きだった。ずっと付き合っていけると思ってる。

どうぞ、とクッションを渡されてこたつの前に座る。ふとその上にある重なった四角い箱が目を惹いた。これはもしかして、もしかすると、

「おせち？」

黒い重箱を見ながら聞いてみる。

「うん。わたしが作ったんだー」

スバラシイ。まさかおせちが作れるとは。にこにこして「開けていいよ」という彼女。

「これは……なんというか、すごいね……」

ふたを取ると、白や黄、赤など、まさに色とりどりだった。

「食べさせてあげよっか？」

ふいにそんなことを言い出した。こんな風に、彼女は見かけとは裏腹に大胆な一面を見せることがある。

「いや、いいよ」

さすがに、いや今回もたじろいってしまった。が、すでに穴の空いた白くて細長い物が口を開けるとばかりに目の前へと突き出されている。これは手遅れだ。観念してバリバリと音を立てて食べると彼女は満足げに微笑んだ。誰も見ていないが、相当恥ずかしい。さらに、はいっとな彼女が差し出す。うっこれはヤバイ。今度こそヤバイ。何がヤバイのかって。ひとくちサイズの手づかみで食べさせようとしてるからだ。こんなもの、かなりの確率で舌と指がこんなにちはしてしまうじゃないか。これはダメだ自分で、なんて思ってるうちにあっさり口の中に入っていた。こんにちはなんてしなかった。ぱきぱきと軽快な音を鳴らして食べる様子を見て「かわいい」なんて彼女が言い出す。思わずむせてしまった。こそばゆくて、それに

なぜか敗北感すらある。くそう。そっちの方がよっぽどかわいいな  
どと言いつ返してやれば、きっと顔を真っ赤にするに違いない。まあ、  
そんな寒いセリフで室温を下げたくないけど。

ふと、重箱の下にあるはがきが気になった。

「これって年賀状？」

「うん、そうだよ」

「まだ出してないんだ」

もう大晦日なのに。失敗でもしたのかな、とおもむろにそのうち  
一枚に手を伸ばす。

「あ！ それは見ちゃダメ！」

遅かった。干支のデザインがプリントされた上から、手書きで文  
字が書かれてある。

『あいしてる

けんたろうのこと

またこんど

しーぱらだいすまで

てをつないで

おつとせいをみに

めとろにのって

でーとしてくれると

とつても

うれしいな』

うわぁ……なんて恥ずかしい……。

「ダメっていったのに……」

年賀状でこんなのもらったら、吹き出してたと思う。出すのを思  
い留まってくれて本当によかった。しかし、あいうえお作文とはい  
え『あいしてる』とか……。ヤバイ。なんかドキドキしてきた。も  
じもじして赤面してる彼女。俺はそんな彼女も好きだ。俯いて緊張

した面持ちもすごくかわいい。あぁっダメだ。来て早々なんて、切り出すのが早すぎるのはわかってる。だけど、もう限界だっ！

「ところでお姉さんは？」

言ってしまった。俺はもう待ちきれなくなっていた。このコのこととは好きだ。でも、お姉さんはもっと好きだ。もちろんこのコと違い、女として。俺はお姉さんの方に会いに来たんだ。

「彼氏のところ」

「え？」

今なんて？

「近所の彼氏のとこに行ってるよ」

[illegible]

ええええええええええええつ ええええええええええええ  
ええええええええええええ！

「今日は帰らないって言うてたけど……」

うあ あつ ああ 嗚呼 ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ  
ああ つ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ

そんつなばかな！

「彼氏ってどんな人かなー？」

平靜を装つて聞く。だめだ、顔が引きつってる。穏やかに、穏やかに。

「ん、うん」

携帯を見せてくれた。画面には二人仲良く映ってる写メ。ああ……俺、完全に負けてる。男の顔を見た瞬間そう思った。それはもう清々しいぐらいに。

おかしいとは思っていた。いつもデートのときはこのコと三人だった。クリスマスもそうだ。どこだろうと、常にこのコが間にいた。衝動的に、目の前のおせちを引っつかんで口の中へと押しやる。

「このうまい棒うんまいよね！」

盛大にバリバリと食べた。もう何を言ってるのかさっぱりわからない。ただ、これがうまい棒なのは確かだ。

「キットカットも感動的においしいよ！」

泣いてなんかいない。ぱきぱきと軽快な音が虚しく響く。包装をひん剥いただけでお菓子を詰め合わせた、ある意味豪華なおせちだった。まだまだくさるほどある。作った、いや詰めた本人はとてもうれしそうに俺を見ていた。

「今夜は二人きりだね」

そうやって腕に頬をすり寄せてくる小学三年生。

あと9年ほど待ってみようか。  
はあ……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2271j/>

---

彼女の部屋で12月31日

2010年10月8日15時06分発行